

「なんかやたら強いモブいたよね」 って言われたいじゃん

わなびさびわなびのわなび

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

magic & swordと呼ばれる、ダークファンタジー戦略ゲームの世界に転生した主人公は、「なんか、そういえばやたら強いモブいなかった？」と言われるくらいの陰の実力者を目指すことを決意する。

目次

君はmagic & swordを知っているか!?	1
ルビー、来襲	3
これはゲームの世界だ	6
これが第一歩	8
なぜ、magic & swordなのか? 前編	10
なぜ、magic & swordなのか? 後半	13
人形は踊る踊る	15
人形は踊る、踊る	18
人形と踊る、踊る、踊る	20
人形は踊る、踊る、踊る、踊る	22

君は m a g i c & s w o r d を知っているか!?

『m a g i c & s w o r d』を君は知っているか

全世界同時接続のVRMMOやらVRFPSなどが
活況する時代に生まれたゲームの名前である。

VR要素がこれぼっちも無い、

ストーリー重視の戦術シミュレーションゲームである。

普通ならそんなゲーム、

コアな層に受けて終了と言われる物であるが

ゲームの内容として、

妖怪、怪物、神、悪魔、天使、なんでもござれと言わんばかりに詰
め込んだダークファンタジーの世界にて

『セルリア法術学園』と呼ばれる場所に平民であった主人公が入学す
るところから始まる。

ツンデレ御曹司や天才同級生、そして数多のモブたちとの交流を深
め

いずれ世界を滅ぼすと言われる邪神たちを倒し

世界を救うといったストーリーを展開するのである。

これが思いの外うまくできており、

ヒロインの闇深要素や

バットエンドルートのエゲツなさ

初見殺しやクソ難易度なボス戦。

それらがコア層だけではなく、

実況者や高難易度好きなどにも受け

ゲームをあまりやらない層からも

”やってる人はあまり見ないが、実況とかでよく見るぜ”

と言われるまでに成長した

奇跡のゲームである。

さて、そんな奇跡のゲーム m a g i c & s w o r d の世界に俺は
立っている。

「どうしてこうなった」

前方に広がるのはゲームで、何度も見た。
と言うかタイトル画面であった。

『セルリア法術学園』がそびえ立っている。

チラリと周りを見てみると、自分と同じ新入生の制服を着た、
猫耳だったり、金髪や銀髪の少年少女たちが、門を通る。

中には、こいつゲームで見たことあるなって感じのキャラや、
あつ確か序盤で主人公に絡みにいって、助けにきたヒロインにボコ
ボコにされる集団もいた。

どうやら主人公が入学する世代に、俺も入るのだなと分かった。

「どうしてこうなった」

再度俯き、呟くと、俺はなぜこうなったを思い出そうと頭を抱える。
転生したのだと分かったのは、8歳の頃であった。

当時、年相応にクソガキだった俺は、

村に来た『聖協会』という、怪しさ満点の宗教の司教から

「君、法術の才能あるねえ」と言われた瞬間

俺の頭はピキーンという音と共に、前世の記憶が舞い込んで来た。

そして気づいたのだ

(聖教会ってあれやん、magic & swordに出てくる味方側の
勢力やん。そしてこの状況、主人公が辿る序盤と同じやん。)

と変な関西弁で、心情を語りつつ、その後司教が「君、とりあえず
セルリア法術学園行こっか」と言葉が(あつこれ、magic & sword
の世界だ)と確信する決め手になったのである。

ルビー、来襲

「あのくそ司教、なーにが、俺に才能あるだ。結局、法術一つしか使えねじゃん」

校門の前にぶつぶつと呟く生徒、完璧に不審者である。

他人のふりをしたい人NO1の姿で俺は呻いていた。

そんな不審者を見かねてか、俺の後ろからカツカツと小気味良い音と共に向かってくる影が一つ

「ちよつとー！その貴方、このセルリア法術学園になんの用ですか！」

振り返ると、ヒールを履いているものの、俺の首ほどしか身長がない少女が、真っ赤な髪を垂れ下げながらキツと睨んでいた

俺は、その少女に見覚えがあつた、というか、magic&sworldにおいて、最も有名なキャラと言っても過言ではない

「赤い聖女、ルビー・キャンベル…」

思わず口から零れる

「あら、私の異名そして名前を知っているということは、ただの田舎者ではありませんね」

ムフツツと言いたげなドヤ顔を浮かべるルビーを見て、俺は思う

(この人、この後亡くなったんだよね…) つと

ルビー・キャンベル

赤い聖女の異名を持つ彼女は、

ここセルリア法術学校の生徒会長であり、

作中の登場人物の内、トップ5には入る実力を兼ね備えたシスターである。

赤い瞳に、赤い髪、小さな背丈は、彼女の祖先の精霊の血が多く受け継がれた結果であると、作中でも、公式ガイドブックにおいても言及されている。

実力主義の傲慢不遜の性格だと思われやすい姿であるが、

そんなことは無く、

同級生や下級生に優しく接し、

時に道を誤りそうになったら自らを犠牲にしても止めるような

性格をしており、

作中では一年生ながら高い実力を示した主人公に対し、生徒会に入るようスカウトし、

そこから、主人公と交流を深めていくことによって、実は負けず嫌いであつたり、

背が低いのを気にしているなどの情報が手に入り、

これはヒロインルート待ったなしという時に

彼女は死ぬ。

(それも、自分が守ろうとした下級生の手によって)

「ちよつと聞いてるんですか、不審者さん。おい」

俺が懐かしいトラウマイイベントを思い出す寸前で、ルビーの声にハツとした

彼女は指一本分の近さまで来ていた

「すみません、ぼーとしてました、生徒会長。

自分は新入生で、道に迷っていたんですよ、

ほら、胸に着けたバッチを見てください」

こう怪しまれている時は、回りくどい言い方をするのではなく、直球で伝えるに限ると思う。

「ムツム、確かに、それは新入生のバッチですね。

偽造品でもなさそうですし、よく見ると不審者さん、新入生の制服を着ていますね」

「その不審者さんっての止めてくださいよ」

「あ、確かに失礼でした、ごめんなさい」

ルビーは深々と頭をさげる。

それを見ている周りからの視線や、

「あの人、生徒会長になんてことを」やら「野郎ッ、下級生の分際で」やら明らかに殺気という形で伝わる。

勘弁してください、ちよつと気になっただけなんです

俺もそんなつもりで言ったんじゃないんですよ

「しかし」とルビーからも少しの怒りが籠った言葉をなげられる。

「新入生くんも、校門まえでぶつぶつと呟きながら、悶絶するのはあま

り良くないですよ」

「以後気を付けます」

「はい、気を付けてください。それと」

——「： クラス決め： 頑張ってくださいとルビーは言った。

これはゲームの世界だ

「クラス分け」"とだけ聞くと、同じ新入生とキヤキヤ、ウフフと盛り上がり、

ゲームによってはヒロインと主人公の対面の場面になっていることも少なくない。

そんなクラス分けのために集められたのは、広いドームであった、たぶん1000人超えても余裕で入るくらいの

『えー、これより、クラス分けを行いますー、皆さんは優秀な司教、シスターの卵でありますので、問題ないと思いますが、くれぐれも「死なない」"ようお願いいたします。』

上に飛んでいる丸っこい聖動器の声に俺は震えあがった、心無し周りの新入生もビビっている。

Mag ic&sw ordにおける最初の難所、

人によつては、「ここが最ムズ」と言われるほどのイベント、その内容というのが、これまたえげつない

『それでは、今から「大魔鬼」"を放ちます』

大魔鬼の5匹の討伐、或いは10分の逃走である。

黒く鋼のような巨体を持ち、「魔術」"を扱うオーガ、それが大魔鬼である。

後に分かることだが、この大魔鬼は竜級に含まれる魔獣であり、

竜級ともなれば、熟練の司教、シスターが30人ほどで対処するほどの強力な存在である

それを実戦経験がない新入生にぶつける。

「うああああああ」

「司教！ クラール司教!! 助けて!」

そりや阿鼻叫喚の嵐になるだろ!

自分が初プレイした時も、それはもうやばかった

逃げるにもほぼ追いつかれ、

戦うにしても

主人公、入学時は、回復法術と無難な剣で殴るとかしかできない。

分かりやすく例えるならこちらの与えるダメージ1、とか10の世界であり、

相手が1000を超えるダメージを放ってくるのである
そりゃ勝てない、完全に負けイベだ。

(でも、確か勝てる奴が今年7人いるんだっけ)

血の雨が降り注ぐドームの中を走りながら、俺は周りを見渡す。
腕がちぎれてうずくまってる奴

腸がはみ出て倒れこんでる奴

四肢が無事な奴なんて、それこそ俺含めて10人もいない。

(見たくなかった)

この試験が始まるというところから、覚悟はしていたつもりでは
あった。

でも、始まってみると想像よりもずっと血生臭くて

なにより、この世界がゲームの世界ではないということを確認しそ
うになるのが嫌だ。

これは、ゲームの世界だ。

でも、俺にとっては現実で、

倒れてしまいそうなほどの苦しみの肺も痛くて

胸からこみ上げる気持ち悪い感覚も本場で、

この世界をどこまでも、「ゲーム」として観ることを自分に言い聞
かせるのは大変であった

だからだろう

体もぼろぼろ、頭もぐちゃぐちゃな時でも、俺はこの言葉が聞こえ
てくるのを知っていた。

「うろたえるな!!皆、わたしについてこい!」

凜とした声、「戦姫」キリカの声である。

俺も含めて、倒れていない人の視線が彼女に集まる

彼女は青い髪をはためかせ、ドームの真ん中に剣を携え佇んでいた
彼女の隣に立つは黒髪の少年。

俺は確信した、あれは主人公で、ゲームの本編が始まろうとしてい
ることを。

これが第一歩

キリカ・グリムガル

Magic&sworldに出てくる最初のヒロインであり、戦姫と呼ばれるほどの少女である。

その剣を持つのも苦勞しそうな華奢な体で、二倍、三倍ほどの敵を素手で撲殺していく姿から、ファンからは、ゴリラやらゴリラやら散々言われ、

最終的に「脳筋姫」というあだ名が公式からでるほどの暴力マシンである。

「皆！私のもとに集え、絶対に守ってやる」

彼女の言葉に何人かの生徒は繼るように向かったが、大半の残った生徒は懐疑的な視線を向けている。

分かる、分かるぞ、俺も何も知らなかったら絶対信じないし、むしろ、この状況で何言ってるんだと叫びたくなるだろう。

「うわああ」

彼女の元に向かう一人の生徒が声をあげた。後ろには大魔鬼が二匹近づく

「案ずるな、私が守ると言ったであろう」

生徒と大魔鬼の間キリカは移動していた。人によっては、瞬間移動のように見えただろう

「ふん」

彼女は流れるように拳をぶつけると、大魔鬼は砕け散ったワンパンである。

その光景に、主人公も、仲間をやられた大魔鬼ですら引いた。俺も引いた。

リアルでみると、やはりドン引きものである。

しかし、予想できていた。これはゲームでも繰り広げられた光景だ。

そんなことしている暇は無い

止まっている大魔鬼に向かって、唯一使える法術、*“聖釘”*を使う

準備をする

“聖なるお方、どうか私に一本、貴方の釘をお貸しください。”

俺の手の平から光る霊体のような一本釘がでてくる。バカみたいに痛いから使いたくない法术であり、原作では裏技によってRTAプレイヤーたちによって悪用されまくった技である。

大魔鬼は、ようやくこちらに気が付いたようだ。

しかし、遅い、俺はもう“聖釘”を放っている。

「グギャ、」

ぶつかり、眠るように倒れた。

自動追尾そして“魔を持つものを即死させる”

それが聖釘の効果である。

我ながらえげつない効果であると思う。

その分、

“自身の持つ全ての聖力”

“また対象を一つしか選択できない”

“魔に関係する存在しか即死の効果が発動しない”

と結構弱点が多い

特に、“自身の持つ全ての聖力”が痛い、一日一回しか使えない挙

句に、人にもよるが自分の場合は、完全に回復するのに数週間かかる。

「まあ、それを回復するために、こいつ狩ったんだけど」

即死している大魔鬼に目を向ける。

俺はこれから、こいつの素材である角を使ってある扉を開きアイテ

ムを手に入れる。

それは最初、どのプレイヤーも「これは二週目、ヌルゲー、余裕で

すわ」と言わしめたアイテム。

そのアイテムの名は、無限聖力外装。

文字通り、無限の聖なる力をもつ外装だ。

。

にやりと笑ってしまう

これが死なないため、生き残るための第一歩だ。

なぜ、magic&swordなのか？ 前編

法術とは神から授かる術である。

この世界の神とよばれるモノたちはある程度にはいるのだが、ある神をのぞいて、法術を授けてくれる神はもう比べる意味がないレベルにまでの異能を授けてくれる

俺が持つ魔絶対殺す法術こと『聖釘』も大概だが

デメリットが無い完全復活『再臨』

あらゆる異能を無力化する『消却異能』

自信のありとあらゆる確率を見通し確定させる『運命』などの、それはまあ最強能力のオンパレードを授けてくれる。

ただ、これらの能力は今では禁止とされた法術である
また

歴史でも使用できる者が10人といないあげくに、

そのなかでも複数人でしか使用できない物が大半だ
主な理由は聖力の不足であるのだが

無限聖力外装とは、羽織るだけで無限の聖力を提供してくれる効果が、禁止された法術と相性がいいと、即座に理解したプレイヤー達は、それはもうやりたい放題である。

禁止とされた法術を使いまくり、勝ちまくり。

ノー防具縛り、味方ユニット無敵化、原作死亡キャラ生存、ラスボスワンパン、あげく、約20分でゲームのルートを全てクリアする猛者プレイヤーも現れたりした恐ろしいアイテムである。

そのアイテムを手に入れるためには、ある扉を開かなければならぬのだが、

『クラス決め 終了です、残っている生徒の皆さんは、その場に立ち止まってください』

丸っこい聖動器が再び会場に響く。すると残り的大魔鬼もその場でピタリと止まった。

俺は『聖釘』を使った影響で倒れているうちに、どうやらクラス決めが終わったようだ。

『今年、無傷かつ立っているのは5人ですか、今年はなかなか優秀な生徒さんが多いようですね』

聖動器は嬉しそうに、声を弾ませると『さて』と言った

『聖火』を落としますくれぐれも絶対に動かないでください』

ガチャという音と共に、聖動器が分解され、中から小さな火の玉が現れ、重力に従うように落ちる。

「はっかー——」と誰かの台詞と共に、辺りは極光に包まれる。

光が収まると分かり瞼を開けると、そこには何人かのシスター、司教が、大魔鬼の死体とけが人の回収に動んでいた。

ゲームでは、主人公は保健室のような場所で目覚めるのだが、どうやら俺には、そのような高尚な場所では起きれないのだなあと思いつつその光景に目をパチくりさせていると

「あー、その君、確か新入生のノゾミ君だっけ」

白い作業服に似た服に包まれた司教が声をかけてきた。

「あつ、はい」

「見た感じ、君は大きなケガはなさそうだし、今日は、寮に帰りなさいまあ何か気になるようだったら保健室に行つてね」

「ありがとうございます」
「うん、どういたしまして、出口はあっちにあるから死体に気を付けて帰つてね」

死体というのは、大魔鬼なのか、新入生なのか考えないようにしよう

「それと、君は『司祭』『クラスだから、3日の始業式には、三列目に並んでね』

『司祭』『クラス』というところと確か三番目のクラスか、

狙いとは違うが、まあ計画に支障は無い

「ああそれと、」と随分おしゃべりな司教が最後に思い出したように口を開く

「新入生の中に『魔術』を扱う子がいるっぽいから、見つけたら担任

に言っ
てね」と

気を付けなければいけないことの
一つを言われ、震えた

そのためになんとしてでも無限聖力外装を
手に入れなければいけないのだ。

さて、忘れる前にゆつくりと思
い出していこう

なぜこの作品は、sacred&sword
やらhoiyart&wordではなく

“magic&sword”というタイトルが
付いている理由を。

なぜ、magic&swordなのか？ 後半

さて、magic&swordのプロローグを終えたプレイヤーたちはこう思った。

これ、魔術要素どこ？つと、

それもそうだ、主人公たちが通っている学校は、「法術学園」だし周りのみんなも「法術」なんて、よくわからん力使うしと、

魔術って悪い奴らが使う術じゃんとか

そもそも剣要素もどこだよ、という感想が溢れた。

しかし、物語の中盤になって、magic&swordの意味が分かるようになる。

セルリア法術学園にて、主力戦力である校長、教頭、対魔術の先生たちが不在時に

「人形師」という、そりやもう、えげつないほど強い魔術師が、何人かの部下を連れて、

学園を襲撃してくる。

俗にファンたちの間で人形防衛線と名付けられた、このイベントの終盤

敵の操り人形と化したルビーキャンベルと戦いにて、主人公が今までうんとともすんとも抜けなかった、腰に掛けられた家宝の剣というのが抜けるのである。

それは、法術を扱うものが絶対に扱えない代物「魔剣」であった。

この出来事により、主人公は世界で唯一魔術と法術が使える人物であると分かる

後に魔剣を使う少年という、一種のネタバレからゲームのタイトルをmagic&swordにしたと公式から発表されたのである。

以降のことから、

「魔術って、本当ですか？ここは天下の法術学園ですよ、魔術なんて使う輩が本当にいるんですか」

俺はとぼけるように答えた。

例えばの話だが

セルリア法術学園に魔術使える奴を知っていると答える、
あるいは看破された時、

ぜったいに、そいつの関係者だと疑われるだろう
疑われるだけなら、まだいい方で。

共犯だと決めつけられたら即、独房送り、あるいは

“執行部”によるリンチ公開劇場である、まだ死にとうない

「あくまで噂だよ、噂、ぼくもこの学園に“魔術”を扱う輩が侵入でき
るとは思わないしね」

「ですよー」

ははははとわざとらしい笑い声をあげたあと

「すいません、そろそろ帰らせていただきますね」

「少し長居させてしまったね。気を付けて帰るんだよ、明日は遅刻し
ないように」

「はい、司教さまも死体処理頑張ってください」

そう労ったあと、俺は会場の出口を抜けた

外は、もうすっかり夕方の情景を映し出しており、真っ赤な球体が
空に浮かんでいる

「帰ろ」

そう呟き、歩く

明日は物語の始まり、そして、俺の計画の始まりだ。

彼が帰ったあと、司教はさて、と言って“体を剥いだ”

「彼は違ったかあ」

中から人が出てくる

そいつは、男にも女にも子供にも老人にも見える

「見つけられるかなあ、魔剣使いの子」

彼あるいは彼女は、“人形師”

人によつては、最悪の魔術師と呼ばれたモノである。

人形は踊る踊る

クラス決めの次の日の事である。

「さて、諸君、席に着いたかね」

大聖堂に集められた俺たちをグルリと一望すると、

白いマントで全身を包み顔は仮面で隠している

如何にもお前敵だろと言いたくなる様な

”大司教”が壇上に立っていた。

「今年は、優秀な生徒が多くとても心強い結果となった」

今年のクラス分けはA組は10人、B組は50人

c組は100人と、例年に比べてAとBが多いと作中では言われている

とういか、50年に1人いれば奇跡と呼ばれる

ほぼ不死身の能力持ちが振り分けられる

A組が10人って

やっぱこの時代イかれてんなあとしみじみと思う。

「さて、諸君の中には、クラス分けの際何故あのような過酷な試練を与えたか疑問に思う者もおるじやろう」

クラスメイト達の目が待ってましたと言わんばかりに校長を睨む

特にC組に至っては殺気が溢れ出している。

そりやそうだよね、だって君たち殺されかけたもんね。

「近頃では、司教またはシスターの紹介さえあれば、誰でも入れると言われている我が校だが、

だからと言ってここが魔族や或いは魔術師を討伐するために作られた組織である事には変わらない」

魔獣、そして魔術師、

この世界における敵NPCなのだが、そりや強い強いなのなの
例えるなら、

こつちが機関車で、

あつちが暴走機関車なのである

法術側は基本的には、例外を除き

しつかりとした法術のルールが整っている
例えば、

法術の神に対する礼儀の言葉を口にする

基本的に、法術は自身の聖力を使わなければならない。

魔術側には、ルールはない

ただ一つ、何かを起こす、或いは使う為には代償を払わなければならないというモノがあるだけ である。

その為、魔術師たちは真っ先に人を襲う

人の命というのは、それはもう唯一無二と言つてもいいほどの価値がある

それを代償として、差し出せば、量にもよるが

どんな魔術も使えるようになるのだ。

絶対殺戮術やら変身魔法やら、人愚物術やらあつちは唱える必要もなく、準備さえすればほほいと使える。

勿論、人を襲う為、信仰が大好きな神様のためにこつちとも敵対する。

他にも色々な勢力から嫌われてる魔術師たちは、

「なあ、お前」

隣の席の奴が話しかけてきた

「何？」

冷たく返すと、相手は「おお」と言いながら、何か嬉しそうに上空に指を刺す

「あれ、お前にも見えてるか？」

指の方向を見てみると、何かいる、不鮮明だがあれは、恐らく”魔獣”だ

(どういう事だ、原作にはそんなイベント無かったぞ)

体がゾクリと震え、瞼をぱちくりさせていると

「おっどうやら見えてるみたいだな、見ろよ、A組の奴らはもういつでも戦闘できる状態にしているみたいだぜ。」

と呑気な声で、隣はしゃべる。

「ふむ、これで入学式を終了ー」

大司教が終わりの挨拶が途切れ、大聖堂は爆発した。

人形は踊る、踊る

大聖堂の爆破の隙間から、這うようにして“人形”は現れた。

「おい、どうなってるんだよ」

人形の姿をみた誰かは震えた声で呟く。

人形、魔術師の中でも最悪と呼ばれた“人形師”が操るモノであり、

それは人形師に敗れ殺された、人たちの集合体である。

自分たちの前に立ちつくす人形は、

四つん這いにされた胴体二つ歪に繋げられ、四本の腕には、教本を
持たされ、なにより虚ろを浮かべる顔がこちらをジツと見つめ「殺し
て、殺して」と微かに漏らしている。

他にも、女性の体に四本の腕と豚の頭を持つ人形。

頭が無く何人にも体を芋虫のように繋げられた人形

顔だけがやたら肥大化させられ、手足には犬に変えられた人形

おおよその人の悪意というものを詰め込んだモノに

「ひでえなあ」と隣は呟いた

本当にひどい、ゲームで見たときよりも醜悪で哀れな姿だった。

「なんでだよ」

その行為に、まだ出てくる時じゃないだろうという言葉もグツと飲み
込んだ

「新入生！落ち着け、こっちに来るんだ！」

キラカ・グリムゾンの声が響く。

すでにAクラスは全員、襲い来る“人形”に対応しており、上級生、
先生たちはもう何体もの人形を倒しているようだ。

「お前、名前は？」

「ノゾミ」

「ノゾミ、どうする彼女の元に向かうかい？」

「いや、まだやることがあるんだ」

隣をみる、改めて見るとやたら美形な人物がそこにいた。

性別は分からない、ボーイッシュな少女にも見えるし、美少年にも見える

しかし、この世界にとってそれは羨むことでは無い。

古今東西、どの物語においても、美少年あるいは美少女というのは、生贄になりやすい

魔術師、魔獣、悪神がある程度存在する、この世界においてそれは特にひどく

美少年あるいは、美少女というのは、よほどの理由がないと生き残れない。

(これは、チャンスだ)

隣にたたずむ少年、もしくは少女が

ルビーキャンベル生徒会長、

脳筋姫キリカ・グリムガル、

あの、黒髪の少年のように、

なにか特殊な力、途轍もない豪運を持つ存在であるなら、

この大聖堂に眠る、無限聖力外装に近づくのが楽になる。

「君も手伝ってくれないか」

自分は最低だ。目的のために他人を利用しようとしてる。

「手伝うって?」

「あるアイテムを手に入れたい、手に入れたのならこの人形たちをなんとかできるかも」

「それって本当?」

隣は目を丸くしている

「本当、そして迷っている暇はないみたいだよ」

ずっと目前で静止していた人形がゆっくりと手に持つ教本をゆっくりと「ame&44」と読み始めた。

人形と踊る、踊る、踊る

多くの本棚に並ぶ部屋中心。

「魔術はできない」とはしないよ」

老獪たる雰囲気を漂わせる司教は、自分に向かって静かに言った
「その分、僕たちの使う法術よりは代償は強大なものになるよ、腕とか内臓とかが有名ところかな」

ゲームにおいて、割と無代償でポンポンと魔術を連発してた主人公ってやつばヤベエやつなんだと再確認

「まあ、それらを代償しても元取れるくらいに恩恵を得れるけどねえ、司教が言っちゃいけない事だけど」

ゲラゲラと笑う司教に、自分は

「司教、それならば、法術のほうかなぜ、広まったのでしょうか？」

ゲームで、何故か触れられなかった疑問を口にする

代償を払っても余裕で、それ以上に返ってくる恩恵

普通に考えれば、法術よりも流行りそうなものだが

「うーん？ そうだなあ確かに、法術は使用するにも、才能がある程度いるのに対して、魔術は代償さえ払えば誰でも使えるしね

まあでもやつぱり、」

「本を狙おう!!」

大声で叫ぶ、どうやら防音の妨害は受けていないようだ

「本？」

「魔術師は本を持ってないと魔術を発動できない」

魔術師は魔術を唱える時、

代償を払う時、

魔剣を作る時、

必ず、本や魔剣を身に付けてなければならない。

それが文字だけではなく、言葉だけでも広がってきた法術との違い
魔術師が少ない理由。

そして魔術師の最大の弱点とも言える

「とりあえず、何か無作為にやるより、ノゾミくんを信じるほうが面白そうだ。」

にやりと隣人は笑うが

「ame&44.44.」

呪文と重なっていく、

魔術は基本的に唱える必要は無い

唱えるという事は”その唱えるという時間”が

代償か

”聖なるお方、どうぞ私に火を灯してください”

隣人はそれよりも早く、早く、唱える

(火の法術!!)

火の法術、それは最強の法術であり

あのルビー・キャンベルが一番得意とした法術

ボツ隣人の腕が真っ青に燃え上がる。

「放龍殺陣拳」

燃え上がる腕は綺麗な半径を描き、手刀の形で振り落とされる

人形は突如として半分に割れ、その切れ目が燃え上がる

一撃である

魔術も意味なく、その場で人形は倒れた

(なんだ今の法術)

ゲーム本編でも出てこない、設定集でも見たことない

知らない法術が、そこにあった。

「それで、君は行くんでしょ、そのアイテムってやつで人形たちをなん

とかできるかもなんでしょ？」

かけられた言葉にハツとする

そうだ見惚れている場合ではない、考えるのは後だ

自分は無限聖力外装を手に入れなければならない。

「ありがとう、行ってくるー!」

「生きてたらまた教室で」

隣人は走る自分に向かって、手を振りながらそう伝えた。

人形は踊る、踊る、踊る、踊る

学園の大聖堂の地下、第7階層と呼ばれる場所に無限聖力外装が眠っている

大魔鬼の角を使って扉を開く

そこには、金銀財宝と法術書が床に散乱している

しかし、”あれに比べれば霞むだろう”

「でけえ」

地の中心。

煌びやかな王座にかけられるは

”無限聖力外装”

その前に立つは、

フロアの約半分を占めるほどの巨体を持った

”ドラゴン”

―古今東西、ありとあらゆる財宝を守る存在はドラゴンである。―と、誰かが言ったのを思いだした。

「グルウ」

寝ていたドラゴンがうねる。うねる。

どうやら何者かが侵入したのに気が付いたんだろう。

「まあ、でも、気づかないだろうな。おそらく。」

大魔鬼の角をグツと握りしめる。

このバグの発見経緯は

バーチャル掲示板で

―大魔鬼の角を持って大聖堂行くと、無限の聖力がゲットできる―という書きこみが始まりである。

多くのプレイヤーは、―嘘おつーだの―証拠UPはよ―などの被弾したが

書きこみ主から、

二周目の始まりから

大聖堂7階層のドラゴンを避けて、

無限聖力外装をゲットする動画が

スレにアップされると瞬く間に拡散され
多くのプレイヤーが検証した。

その結果、この書きこみが本当だと分かり
無限聖力外装の存在が明るみに出た。

それぞれどこか、

一周目でも頑張れば手にできるだとか

ドラゴンには、

聖釘も火の法術も禁止された法術もあんまり効かんからバフあげ
て物理攻撃が鉄板だとか

最大まで上げた『神怒』で扉壊せるだとか

隅々まで攻略されてしまった

プレイヤー恐るべきである。

ともあれ、安定の攻略法は、

地下まで降りて、扉を大魔鬼の角で開ける

そして、角を装備したまま、ドラゴンを避け

外装を手に入れると、出口までダッシュが基本となっている。

「しかしまあ、ほんとに逃げ切れるかなあ」

王座の前まで、なんとかバレずに辿り着く。

外装に手をかける前に、そんな不安が襲う

相手はドラゴン。法術も魔術も

それどころか後に出てくる東術も効かない

化け物

「まあ、でも早く戻らないとな」

名の知らぬあの隣人が心配である、

自分の提案に乗ってくれた彼女をミスミス危険に晒し、

あまつさえ死んでしまつたら、後見が悪い。

「頑張るか」

外装に手をかける

瞬間、空気が変わる。

辺りに拡散されている財宝は熱で溶け、法術書は何かを恐れるよう
に輝く

熱い、熱い

触れた時、あまりの熱さに手が溶けそうだと思った

それも、そうだ、無限の魔力の塊、自分みたいな存在が触れていいものでもない。

熱さから取れない外装に、悪戦苦闘してる時。

ドラゴンがゆつくりとこちらに向いた。